

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **4** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆(シャープペンシルも可)を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や**。**や**などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 嘱託社員として働く。
- (2) 不正行為が発覚し、その裁判官は罷免された。
- (3) この会社は因襲にとらわれている。
- (4) 事件の核心に迫った意見。
- (5) 家に友人をマネいた。
- (6) 分別してゴミをスてた。
- (7) コウテツの骨組みで造られた建物。
- (8) 問題を解決するために、トウギを重ねた。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

音和は一学期終了後に転校することになった。夏休み中に転校先の学校に行ったとき、担任となる河井と話をした。その際、二期期の最初の授業で「夏休みの思い出」について、生徒それぞれが発表することになっていると聞いた。

二期期の国語の授業は、河井があらかじめ予告したとおり、生徒たちが語る「夏休みの思い出」ではじまり、きょうはその二回目だった。テーマをあたえられていたのかと思うほど、多くの生徒がこの夏の注目すべき天体ショーを話題にした。国内で四十六年ぶりに皆既日食を観測できるはずだった。

いすわった雲のおかげで、期待はずれに終わった。雲を透かしてうす日を見ることはあっても、太陽はその姿をはっきりとはあらわさなかったのだ。天候の気まぐれに泣かされた生徒たちは、それぞれが⁽¹⁾おなじようなことばで、恨めしさや口惜しさを語った。

似かよった発表がつづいたあとで、河井はひとつづりの印刷物を配った。かつての部分日食のさい、理科部の生徒たちが記した観察日記の写しだった。そこには、三日月のかたちの木もれびが、数かぎりなく学校の坂道にちらばったことが書かれていた。

葉と葉のかさなりあいによってできた穴を通過する光は、^{*}ピンホールカメラとおなじ現象によってまるく像をむすぶ。それが通常の木もれび

だ。太陽が欠けると、その投影も欠ける。地面に映る影と光は、葉むらのシルエツトであり、食をうける太陽の姿なのだ。

生徒たちから、ためいきがもれた。三日月のかたちの木もれびを、まのあたりにした幸運な先輩たちへの羨望(a) けんぼうというよりは、望んでも手にはいらないものについて聞いたり読んだりする、かすかな腹立たしさであつたかもしれない。

「国内で、つぎの皆既日食が観測できるのは二十六年後だ。それがだめなら、四十四年後もある。」

河井はあっさりと云う。十四歳の生徒にとつて、二十六年後は途方もなく先のことだ。まして四十四年後のことなど、なにも考えられない。彼らは一生に一度きりかもしれない機会をのがした思いでざわめいた。

不満をのべる生徒たちに、ありきたりの白ではなく黒の、しかもまだ暑い季節なのに長そでで、すそも長い仕事着を身にとつた河井が、どうして自分の目で見えることをそれほど重視するのかと問う。

「先輩たちが、切り通しの道で、三日月がたの木もれびを見た。その記録を読みきみたちも、たつたいま、それを見たじゃないか。ちがうか？」

この教師は、みじかめに刈かつた髪を立てていることでも異風いふうであつたが、アイスグリーンのレンズのふちなしのめがねをかけている点でも、ふつうの授業はしないのだということが、見てとれた。

「どこが不足なんだ？ 自分の目で見たものでなければ、自分のものにならないと、本気で思うのか？」

現実かどうかが重要なんです、と生徒のひとりが云い、ほかの者たちもうなずいた。⁽²⁾ まったく、きみたちは重量級の石あたまだ。若いく

せに、と河井は黒い仕事着のそでを左右とも、すこしつまみあげた。それが話をはじめるまえのクセだつた。

「私は少年の日の夏、きみたちが日食の観測会に参加したのとおなじように、期待にみちて、野川にホテルを復活させようというグループのイベントに参加した。いまの野川の流ながれは濁にごりもなく、岸辺も草の生える土の堤つみでできている。川床かわどへおりて、水遊びをすることもできる。きみたちは、これが自然の状態だと思っただろうが、実はそうじゃない。私が小さな子どもだつたころは、都会によくあるどぶ川だつた。側面も底もコンクリートでかため、排水や雨水を海まで運んでゆく、あのだぶだ。大雨がふれば、たちまち増水して、道路まであふれだした。濁か水すいになると、異臭を放つた。だが、一部では岸辺を土にかえず取りくみもはじまつていた。川べりに家を建てていた人たちが移転して川幅をひろげ、土手と緑地帯と遊歩道を整備する改修がおこなわれた。そうして、私が中学生のころ、いまの姿になつたんだ。十五年ぐらい前の話さ。たしかに、川らしい川になつた。草も木も生えている。でも、この川が、田園風景にとけこんでいた昔とおなじになるには、絶対的に欠けているものがあつたんだよ。それが、ホテルというわけさ。改修工事が終わつた記念に、保存会の人たちが大事に育てたホテルを放つイベントがおこなわれた。月のない晩を選んで、まわりの照明を消し、ホテルを放した。参加者は、息をこらして待ちかまえ、小さな光が闇やみのなかをただよつたのを見たよ。ひとつ、ふたつ、たよりない光をともして、飛んでいる。どこかもの哀あなしく、はかないものだと思つた。それでも、じゅうぶん心にこつたんだが、そのあとで、地元の年配の人が話をはじめた。三十年

ほど前まで小学校の教員をしていたという女の人で、Tさんという。自分が子どものころの夏の光景を語ってくれたんだ。かつて、受け持ちの子どもたちにもよく話してきかせたそうさ。というのは、三十年前、……いまからだと四十数年前になるが、すでに野川のホタルは姿を消していたからね。このあたりに自然の状態でもホタルが棲息していたのは、六十年以上前の話なんだよ。きみたちの祖父の世代が子どもだったころさ。当時は野川が田圃のなかを、うねうねと蛇行しながら流れ、土手もなく、せいぜいちよつとした盛土がしてあるくらいで、水をはった田圃と川面はほとんどおなじ高さだった。Tさんはそんな時代の話をしてくれた。私は自分の目で見なくても心にのこる風景が、この世にあるんだということを知った。……これからその話をする。心して聞けよ。」

河井はそこで、みなに聞く気があるかどうかをたしかめるように、教室を見わたり、それからあらためて、話をつづけた。

「きみたちはむろん、私が生まれたのよりもさらにずっと昔、この学校の崖の下は、見わたすかぎりの田圃だったんだ。野川はそんな田圃のなかを、たつぷりの水をたたえて流れていた。今も、住宅地のなかに、ひとりやひとり通りぬけできるよう細道がのこっているが、それは昔のあぜ道のなごりだよ。田圃の境界線だったところだ。野川に向こうはむろん、崖地と野川のあいだも、冬でも干あがらないような湿地だった。一年じゅうどこからでも、水が湧きだしてくるからさ。農家の人もそうでない人も、あぜ道を歩いた。野川をよこぎるときは、板橋をわたった。ほんとうにただの板切れだよ。ところどころにあった堰とため池で、水量を調節するんだ。⁽³⁾ Tさんの、子どものころの野川はそんなふうだっ

た。初夏のころは、湿地も田圃も野川も、区別がつかないほど豊かにひろがる水辺だ。夜になれば、森の暗がりは空よりずっと黒々として深い。その森がそっくり水に映るぐらい田圃はひろく、静かだった。水は、しん、として、どこまでがほんものの森で、どこからが影なのか、さっぱりわからない。夏のある晩のことだった。Tさんは窓があんまりあかるいので、そのまぶしさで目をさましてしまった。まぶしくてたまらない。でも、まだ朝ではなかった。一番鶏も鳴いていない。どう考えても夜中だ。夏だったので、雨戸をたてていなかった。だから、窓そのものが光りかがやいているんだ。だが、月夜ではない。それに月夜だったとしても、そこは北窓で軒も深かったから、そんなあかるく照らされるはずはない。雷鳴も聞こえないので、雷さまでもない。さて、と子どもだったTさんは首をひねった。夢のつづきかと、うたがった。窓辺はますますまぶしくなるばかり。とうとう決心して寝床からはいだし、そっと窓の外をのぞいた。思わず息をのんだ。そこには、見わたすかぎりどこまでも、どこまでも、ホタルが飛びかっていたんだ。光にあふれ、天も地もなく、ここもあそこも、川の向こうの湿地も田圃もぜんぶ、数かぎりないホタルの群でうめつくされていた。数千なのか、数万なのかもわからない。明滅をくりかえしつつ、飛びかっている。それらはもはや小さな点のあつまりではなく、光に満ちあふれた海だったんだ。」

話が終わったとき、⁽⁴⁾ 生徒たちはふっと息をついた。不平のためいきとはあきらかにちがう。それまで呼吸をするのを忘れていて、ようやく思いだしたかのようだった。⁽⁵⁾ 河井は、生徒のひとり名指しして、今の話でなにか風景が見えたかとたずねた。生徒はうなずいた。意識に灼

きついた光景と完全には切りはなされていない顔だった。

「それはよかった。その風景は、きみ自身が目にしたので体験したのでもないが、きみだけのものとしてそこにある。どうだ、すごいことじゃないか？ 確信を持って云うけれど、それは一生きみのそばにあるよ。このさき、何度でも思い返すことができる。しかも、実際に目にした風景と変わらなくらいに、あるいはそれ以上のあざやかさで目に浮かぶはずだ。」

音和が二学期からかようことになった学校は、こんな教師がいるところだった。生徒たちに夏休みの報告をさせながら、ちよつとした感想や意見をのべる。あるいは、いまのような話をきかせた。

(長野まゆみ『野川』による)

〔注〕 ピンホールカメラ——写真レンズを使わないで、針で突いて

できた小さな穴を利用したカメラ。

盛土もりつち——土を盛って高くすること。

堰せき——石や土を盛って、水の流れをせきとめるもの。

〔問1〕⁽¹⁾ おなじようなことば とあるが、「ことば」の説明として最も

適切なのは、次のうちではどれか。

ア 夏休みが想像以上につまらなかったことに対する、後悔や無念のことば。

イ 夏休みの期間が天候不順ばかりだったことに対する、悔恨や悲観のことば。

ウ 四十六年ぶりの天体ショーが中止になってしまったことに対する、幻滅や納得のことば。

エ 皆既日食を観測することができなかったことに対する、未練や落胆のことば。

〔問2〕 ^(a) 羨望 ^(b) 息をこらして とあるが、本文中で述べられている

「羨望」「息をこらして」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。それぞれ選べ。

^(a) 羨望

ア あこがれること

ウ いきこむこと

^(b) 息をこらして

ア 緊張して

ウ じっとして

イ うらやむこと

エ ねたむこと

イ ほっとして

エ 呼吸をとめて

〔問3〕⁽²⁾ まったく、きみたちは重量級の石あたまだ。とあるが、な

ぜ「河井」は「生徒たち」に対してこのように表現したのか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 生徒たちが、先輩たちの観測日記をまったく理解していないから。
- イ 生徒たちが、何も考えずにすぐに結論を出そうとしているから。
- ウ 生徒たちが、自分で体験したことをあまりにも重視しているから。
- エ 生徒たちが、自分の目で見ていないものを現実だと思っているから。

〔問4〕⁽³⁾ Tさんの、子どもたちの野川 とあるが、どのような風景

であったと考えられるか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 田と田との間に流れる川には大きな橋が架けられ、蛇行しながら田に水を注いでいる風景。
- イ 田と田との間には細い道があり、川はたっぷりの水で満たされて流れている風景。
- ウ 田圃が干あがらないくらい水が湧き出し、川はあふれることもあるため、遊歩道が整備されている風景。
- エ 昼夜を問わず、黒々とした暗がり広がり、川の周辺は水音一つしない静寂につつまれている風景。

〔問5〕⁽⁴⁾ 生徒たちはふっと息をついた。とあるが、この表現から分かる「生徒たち」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 河井の話に引き込まれていたが、話が終わったことにより、張りつめていた緊張感がほぐれている様子。

イ 河井の話にのめり込んでいたが、話が終わったことにより、河井の話が今一度整理しようとしている様子。

ウ 河井の話に感動していたが、話が終わったことにより、その感動していた気持ちが冷めてきている様子。

エ 河井の話に圧倒されていたが、話が終わったことにより、この後どのようにしたらよいか考えている様子。

〔問6〕⁽⁵⁾ 河井は、生徒のひとり指名指しして、今の話でなにか風景が

見えたかとたずねた。とあるが、生徒はどのような話を聞き、どのような風景が見えたと考えられるか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 河井がこれまでの人生の中で実体験した話を聞き、自分の記憶の中に刻み込まれ、何度でも思い返すことができるものとして心の中にとどまった風景。

イ Tさんがこれまで経験してきたことを聞き、自分が今までに見てきたことがある光景と照らし合わせ、記憶の奥底から浮かび上がってきた風景。

ウ 河井がTさんに語ったことと同じ話を聞き、実際に目にしたものではない光景であることを悔やみながらも、これからもずっと忘れられなくなった風景。

エ Tさんが語ってくれた話を河井から聞き、実際に見ていなくても自分が見たものと変わらないくらい鮮明に、自分だけの光景として記憶に残った風景。

〔問7〕 本文の表現の特徴について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 音和の視点を通して河井の言動をとらえることで、個性的な先生であることがわかるように描写している。

イ ひらがなで表記することを多用することで、河井が先生として未熟なところがあることを暗示している。

ウ 長い発話を入れることで、生徒たちが理解していない事柄を明確に示せるように工夫している。

エ 音和だけでなく生徒たちそれぞれの行動を描写することで、河井の人物像をイメージしやすくしている。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

私がこれまで開発してきたロボットは、どれも人間に似たロボットである。少なくとも、工場で働いているマニピュレータや自動搬送車のようなものではない。人と関わることを目的に開発された、人間にそっくりのロボットだったり、人間と違って、顔や手があったりするロボットである。

では、なぜ人と関わるロボットは、このような人間型でないといけないのか？ その答えは、

〈人間は人間を認識する脳を持つ〉
からである。

人間の脳は、どのように進化してきたのだろうか。もちろん、様々な道具を使えるように進化しているのが、それ以前に、人どうしで対話したり、協力し合ったりするために、脳が進化してきたことは明らかである。昆虫や動物を見ればさらに明らかで、道具は使えなくても、同種間でコミュニケーションをすることができる。それゆえ人間においては、その脳を、人間を認識し、人間とコミュニケーションをするために進化させてきたと言える。

ではその前提において、人間にとって最も理想的なインターフェースとはどんなものだろうか？

それは人間である。人間が最も関わりやすいものは人間なのである。ゆえに、人間と関わるロボットは人間らしくあるべきで、少なくとも部

分的には人間らしい機能を持つ必要がある。そうでなければ、そのロボットを利用する人間は、ロボットの使い方をかなり努力して学ぶ必要がある。

そして、また一方で、

〈人間らしいロボットは、人間を理解するテストベット（研究材料）になる〉。

その人間らしいロボットと関わることによって、そのロボットと十分自然に関われるかどうか評価することができるのであるが、その関わり方が人間らしかったとすると、そのロボットには人間らしさの何かが再現されていることになる。すなわち、⁽¹⁾その人間らしさの秘密はロボットに実装されており、ロボットを分解して中身を見ることによって、人間らしさの秘密を知ることができるのである。これが、人間らしいロボットを用いて人間を理解するということである。

このような人間に似たロボットを用いて、人間を理解する研究の方法は、「構成的方法」と呼ばれる。

構成的方法の反対は、「解析的方法」である。解析的方法において、例えば人間のようなロボットを開発するでしょう。

例えば、脳の機能について言えば、脳の各部位の機能は徐々に解かってきたのであるが、全体としての働きはまだほとんど理解できていない。その一つの例が意識である。意識はどのような仕組みでもたらされるのか、ほとんど理解ができていない。それゆえ、⁽²⁾ 解析的方法では、意識を持つようなロボットは造ることができないし、意識ほど複雑でないものでも、その仕組みは完全に理解されおらず、解析の結果をもとにロボットを造るといことは難しい。

一方で、人間の精緻な解析結果にもとづかずとも、人間のように振る舞うロボットを造ることはできる。人間とは構造が異なっている、人間らしく二足歩行するロボットは実現されている。そうしたロボットの開発においては、必ずしも完全に人間の二足歩行の原理を理解している必要はないのである。いまだ人間の二足歩行は完全に理解されていない。私たちの知らない多くの性質がある。しかし、技術や経験によって、人間の二足歩行の原理を完全に理解していなくても、また人間の二足歩行と多少異なっても、実際に二足歩行できるロボットを造り出すことはできている。

このようにして、いったん、技術や経験によって二足歩行を実現してしまうと、今度はそれをもとに、人間の複雑な二足歩行について理解を深めることができる。その二足歩行ロボットを使って、二足歩行に関する様々な仮説を検証したり、より効率的に歩くことができる二足歩行ロボットに改良したりすることで、人間の二足歩行の真のメカニズムに近づけることができる。すなわち、

〈ロボットを開発することで、人間を理解することができる〉

のである。このように、工学的方法によって、⁽³⁾ 複雑なものを構成し、それをもとに複雑なものの原理を理解する研究方法が構成的方法である。

脳全体や体にも関わる複雑な機能は、従来の解析的方法では、理解が非常に難しい。一方で、構成的方法を用いれば、複雑だが誰もが知っている基本的な人間の機能について、実際にロボットを造ってみることで理解を深めることができる。近い将来、⁽⁴⁾ ロボットがより進化し、人間のパートナーとなつて働く世界を実現するには、知能や意識や感情といった人間の基本的な機能は非常に重要になる。構成的方法を用いれば、それらについて理解を深められる可能性がある。

ちなみに、このような構成的方法にもとづく研究開発は、人と関わるロボットに限ったものではない。

〈世の中の最先端の多くの研究開発が、むしろ構成的方法で研究開発されている〉

と考えられる。

例えば、スマートフォンのデザインはどうであろうか？

人間の認知機能を精緻に解析して、その結果得られた知見をもとに、スマートフォンはデザインされたのだろうか？ そうではない。直感の優れた技術者がひらめきをもとにデザインし、実際に商品として売り出したら爆発的に普及したということだろう。そして、普及した後になって、多くの研究者が、なぜ今のスマートフォンのデザインが、人を惹きつけるかを研究している。これはまさに構成的方法そのものである。ひらめきでデザインされた人を惹きつけるスマートフォンと、それをもと

にした人間の性質の理解である。

人間は様々な人工物を利用する。そうした人工物は、人間が利便性を感じ、人間能力を拡張するように作られている。しかし、私たちはまだ人間について完全な知識を持たない。それゆえ、経験やひらめきにより、えいやつと製品を作り出し、その製品が多くの人に受け入れられた後に、人間の性質を反映しているものとして、その製品を通して人間を理解する。言いかえれば、

〈産業が先に興り、人間理解は後追いである〉
ということになる。

研究開発が産業に先行すると考える人は多い。特に研究者や政府の役人は研究の重要性を、それが産業を興すためだとする。もちろんそうした事例は少なからずある。しかし、重要なのは、新しい発明や創造の多くは、経験やひらめきによってもたらされていることである。ノーベル賞を受賞した多くの発明も同様である。

物事を深く理解する解析的方法は、特に学問として重要である。一方で、新たな発明や発見は構成的方法でもたらされていることが多い。今後の研究において、研究者はより強く、構成的方法を意識すべきではないかと、私は考えている。

(石黒浩『ロボットと人間 人とは何か』(一部改変)による)

〔注〕 マニピュレーター——人間の腕を模倣したロボット。

インターフェース——異なる種類のものを結びつける接触面。
精緻——詳しく細かいこと。

〔問1〕⁽¹⁾ その人間らしさの秘密はロボットに実装されており、ロボッ

トを分解して中身を見ることによって、人間らしさの秘密を知ることができるのである。とあるが、それは具体的にどういふことか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 人間を認識する能力が内部に備わっているロボットを解体し、再構築することによって、人間らしさについて知ることができるということ。

イ 人間らしく感じさせる要素が組み入れられたロボットを解析し、改良することによって、人間らしさについて知ることができるということ。

ウ 人間と自然に関わる力が内蔵されたロボットを分析し、どこにその力があるのかを確認することによって、人間らしさについて知ることができるということ。

エ 人間と円滑にコミュニケーションできる機能が搭載されたロボットのデータを収集し、数値を検証することによって、人間らしさについて知ることができるということ。

〔問2〕 の中にはア、イの文が入る。文意が通るように正しく

並べかえ、その順番を記号で書け。

ア しかし、人間をそう簡単に調べることができることはできない。

イ まずやるべきことは、徹底して人間を調べることである。

ウ 人間を完全に調べきった後で、その知識をもとにしてロボットを組み立てる。

エ 人間そのものを理解することは、多くの研究分野の目的であり、いまだほとんど解^わかっていないと言っても過言ではない。

〔問3〕⁽²⁾ 解析的方法では、意識を持つようなロボットは造ることがで

きない。とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 人間の意識の仕組みをまったく理解することはできないから。

イ 意識を徹底して調べても、人間の意識には個体差があるから。

ウ 意識のような形をもたないものはつくることはできないから。

エ ロボットの意識とは人工知能のことで、人間の意識とは異なるから。

〔問4〕⁽³⁾ 複雑なものを構成し、それをもとに複雑なものの原理を理解

する研究方法 とあるが、その研究方法の事例として最も適切な

のは、次のうちではどれか。

ア 人間の能力を拡張する機能を搭載し、世界に普及したスマートフォンをもとに、デザインの影響について研究する。

イ 徹底して人間の脳を調べ、すべての原理を理解した上で意識を持つたロボットを組み立てること、ロボットの意識について研究する。

ウ 二足歩行の原理を分析し、それを完全に再現したロボットを造り、二足歩行の新たな可能性について研究する。

エ 技術者のアイデアをもとに商品化され、人々に受け入れられたスマートフォン^①のデザインが、なぜ人を惹^ひきつけたのかを研究する。

〔問5〕⁽⁴⁾ ロボットがより進化し、人間のパートナーとなつて働く世界

を実現する とあるが、筆者はそのためにどのようなアプローチが必要だと考えているか。その説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア まず外見が人間に似ているものを造つて、それを改良していくこと。

イ 人間のもつ複雑な機能を理解するために似た性質のものを造つて、検証していくこと。

ウ 直感やひらめきの優れた技術者の意見を重視し、製品を開発していくこと。

エ 知能や意識や感情について徹底して調べ、複雑な原理を理解していくこと。

〔問6〕 この文章の展開を説明したものととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 最初に人間に似たロボットを造ってきた理由について説明し、次に人間の複雑な機能の研究方法について具体例を交えて述べ、最後に今後期待される研究成果について言及している。

イ 最初にロボットを人間らしく造る意義について説明し、次にロボットを用いた研究開発方法について対比的に述べ、最後に新しい発明や創造に必要な考え方について言及している。

ウ 最初に人間に似たロボットが研究材料になることについて説明し、次に徹底的に人間を調べてからロボットを開発する方法を否定的に述べ、最後に産業を興すことを重視した研究方法について言及している。

エ 最初に人間の進化の過程について説明し、次にロボットの研究が人間の機能の原理を解明するために有効であることを述べ、最後にロボット開発と人間の能力拡張の関係について言及している。

〔問7〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「経験やひらめきによって

新しいものを生み出すこと」というテーマで自分の意見を発表することになった。このとき、あなたが話す言葉を具体的な体験や見聞を含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や、や」などもそれぞれ一字と数えよ。

です。真淵以来、古代の理想的人間像、和歌の理想「ものあはれ」が追求され、和歌が日本国家や、理想的人間像と結びつけて論じ⁽⁴⁾られるようになっていったのです。

江戸時代も中期になってくると、伝統からの脱却を図る、新しい歌人が登場します。その代表が小沢蘆庵^{あん}です。蘆庵は、日常語を用いた「ただごと歌」を提唱し、新しい歌の世界を切り開いていきます。蘆庵のこ

とばを引いてみましょう。
あまねく世にみちみちて誰も知れる詞をもて、三十一字に続く
を、歌といふなり。

〔振分髪〕

今自分が思っていることを、我が言はるる詞をもて、
ことわりの聞こゆるやうに言ひ出づる、これを歌とは言ふなり。

〔布留の中道〕

誰もが知っている日常的なことば「ただごとば」を用いること、自分の心を、自分の詞で、わかりやすく歌うべきという作歌法です。素直かつ自然に詠むことの重要性を説いています。先の真淵以下、門下の歌人たちが、万葉語を用いていることもよしとしません。それはなぜかというと、一般の人に理解できないからです。誰が読んでもわかりやすい歌でなければなりません。こうなると、これまでの伝統的な歌の世界から離脱して、新しい時代へと向かう道のりが見えてきます。

では、蘆庵の歌を引いてみましょう。

太秦にていと寒き夜、狐の鳴くを

(5) 月暗く霰乱れて降る寺の寒き垣根に狐鳴くなり

〔月光が暗く、霰が降り乱れている古寺の寒々しい垣根で狐が鳴いている〕

訳す必要がないくらい、平易な歌です。なんとも荒涼とした寒々しい光景を、写實的に描写した一首です。まさに「ただごと歌」です。古典を重視してきた、これまでの伝統的和歌から、現実の体験を重んじる歌へという、近代短歌への道筋が見えてきます。

〔谷知子『和歌文学の基礎知識』による〕

掲載の許可が得られないため公開できません

〔注〕 勅撰集——勅撰和歌集。天皇または上皇の命令によって作られた和歌集。

後水尾院——第一〇八代、後水尾天皇。

歌壇——歌人の集団。

靈元院——第一二二代、靈元天皇。

賀茂真淵——江戸時代の国学者、歌人。

徳川吉宗——江戸幕府第八代将軍。

田安宗武——江戸時代の国学者、歌人。

ますらをぶり——雄大で力強い歌風。

古今集——古今和歌集。

たをやめぶり——繊細で優美な歌風。

屋号——家につけられた呼び名。

本居宣長——江戸時代の国学者、歌人。

小沢蘆庵——江戸時代の国学者、歌人。

振分髪——小沢蘆庵の歌論書。

布留の中道——小沢蘆庵の歌論書。

太秦——山城国（現在の京都府）の地名。

〔問1〕⁽¹⁾ 近代短歌の礎となる革新の部分 とあるが、「革新の部分」と

はどういうことか。その説明として最も適切なものは、次のうちで
はどれか。

ア 自分自身が見聞きしたことを、日常的なことばを用いて写実的に描
写すること。

イ 一般の人に理解できるように素直かつ自然に詠むことを心がけ、伝
統的な表現を使わずに描写すること。

ウ 古典を基盤にしながら、日常語を用いて情景、場面構成をわかりや
すく描写すること。

エ 現実の体験のみを重視し、簡単なことばを用いて自分の心をわかり
やすく描写すること。

〔問2〕 には、共通したことが入る。Ⅱの和歌の中から

七字以内で抜き出せ。

〔問3〕 月と雁を逆転させたような趣⁽²⁾ とあるが、どういうことか。

その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 真淵の歌は、「月影に雁鳴きわたる」と月を人に見立てて詠まれているが、『万葉集』の歌は、「雁が音の聞こゆる空を月」と雁を人に見立てて詠まれている。

イ 真淵の歌は、「月影に雁鳴きわたる」と、雁に焦点を当てて詠まれているが、『万葉集』の歌は、「月渡る見ゆ」と月に焦点を当てて詠まれている。

ウ 真淵の歌は、「月影に雁鳴きわたる」と、月影に雁の飛んでゆく姿が詠まれているが、『万葉集』の歌は、「雁が音の聞こゆる」と鳴き渡る雁の声だけが詠まれている。

エ 真淵の歌は、月の見えない部屋に雁の鳴き声が聞こえてくる、と詠まれているが、『万葉集』の歌は、外で月を見ているときに雁の鳴き声が聞こえてくる、と詠まれている。

〔問4〕 『万葉集』を基盤にしながら、『古今集』を応用したうえで取り込み、一首を構成しているのです。⁽³⁾ とあるが、どういうことか。

その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 月見という伝統的な『万葉集』の枠組みを生かしながら、『古今集』に詠まれている表現を日常語として詠み込んでいる。

イ 夜、月、雁という『万葉集』に詠まれた伝統的な歌のことはそのまま用いているが、『古今集』の表現を用いて新鮮さを表現している。月夜に雁が鳴いているという『万葉集』の歌の発想を生かしながら、『古今集』の表現とは違った意味で歌に詠み込んでいる。

エ 月夜と雁という『万葉集』で詠まれている取り合わせの妙を生かしながら、『古今集』独特の新しい調べを模倣している。

〔問5〕 ——⁽⁴⁾ と同じ意味・用法で使われているものを、次の各文の——を付けた「られる」のうちから選べ。

ア 一人で和服が着られるようになった。

イ お客様が店内に入って来られる。

ウ 楽しい時間は短く感じられる。

エ 沿道の人たちから声援をかけられる。

〔問6〕⁽⁵⁾ 月暗く霰あられ乱れて降る寺の寒き垣根に狐鳴くなり の歌に用い

られている表現技法について説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 実質的な意味はない「月暗く」は、「霰」を修飾している。

イ 「月暗く霰乱れて降る寺の」は、後半部分との関連性はないが、「寒き」を導き出すための前置きとなっている。

ウ 「月」は、「寺」「狐」と意味上の関連性が深い言葉として用いられている。

エ 「降る」は、「霰が降る」と「古寺」という二つの意味が込められている。